

日本バプテスト連盟

性差別問題特別委員会

ニュースレター 第30号、2019. 2. 20

★日本バプテスト連盟のホームページでも読むことができます。



**イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」(ルカ 10:37)**

渡辺 貴子

2年前より生活困窮者支援の窓口で家計相談員をしています。窓口には困窮者に限らず様々な方が来訪します。まず主訴(困っていることは何か、どうしたいのか)を尋ね、その要因を聞いていきます。そして本人自らが課題を解決できるよう支援するのが主な仕事です。このとき家族関係も聞きます。もちろん話さなくてもいいのですが、利用できる制度がないかと考えるときに、世帯人数や家族の年齢、世帯収入が関係してくるので、尋ねる必要を説明します。聞いた内容はジェノグラム(本人を中心とした家族関係を理解するために作成される図)を用いて、男なら□、女なら○、結婚か離婚か、子どもは何人で性別は?と記録していきます。このように個人的な情報を枠にはめて聞くことに、相談員になってすぐの頃は抵抗がありました。でも、私たちが暮らす社会では、例えば婚姻関係にあるのか、同居の家族に収入があるのか等で利用できる制度が異なり、そして「長男」や「母子」など性別や関係性が特別な意味を持つ現実を目の当たりにします。

生活に困窮している人の中には今を生きることに必死で制度を知らずに公的サービスを受けていない人も多く、また社会の多数派ではないために今の制度の狭間で支援や受給できる手当等がない場合もあります。そのあたりを丁寧に聞き取り、助けになる制度を探すことが支援の近道になります。

相談者との信頼関係を構築するために、友好的な関わりを心がけています。一方で差別や力関係を再生産しないよう気を付けているつもりです。しかし、たとえば「おつれあい」「オットさん」が伝わらなかつたり、支援を受けることは恥だと思っている人に支援を促す役所対応が結果的に脅すようであったり、お金について家人と話すのが怖いという人に対等の関係をと促して、相談が途絶えたこともあります。

相談を受ける側もめげてはいられません。人と人の出会いには希望があることを、礼拝を通してイエスさまは教えてくださいます。そのことを教会は伝えることができるのではないかと、未来を見えています。

(わたなべ たかこ/性差別問題特別委員会協力委員 福岡ベタニヤ村教会)

### 「第3回 性と人権 キリスト教全国連絡会議 2018」

テーマ：教会の異性愛主義・家族主義を問う

実行委員として目指したもの、分かち合ったこと

河内 理恵

2012年に超教派で始まったこの会議は、今回で第3回目。私は前回参加し、会が継続していくことを望んで実行委員となり、他の4人のメンバーとともに準備しました。

近年、LGBT、パートナーシップ条例など、性的マイノリティーに関する言葉に触れる機会は増えたように思われます。しかし、米国ではセクハラを告発する#Me,Too運動が盛り上がりを見せましたが、日本においてはセクハラをした国会議員や官僚が野放しにされ、「子を産まない性は生産性が無い」と政治家が差別発言しても謝罪されない状況があります。女性や性的マイノリティーに対する差別を批判するより、差別の解消に抗う力が働いているかのようです。その背景には、軍事化を進めるため戦前の家族主義回帰、そのための異性愛主義を推し進める方向で改憲しようとする政府与党の意図が見えます。一方キリスト教会の中にも同様な、むしろ強固な構図があります。女性や性的マイノリティーに対する差別や排除の根拠に聖書解釈や信仰が利用され、クリスチャンホームが理想とされる教会の価値観が暗黙の内に存在します。その異性愛主義、家族主義（父権主義）の中で、声をあげられない人や声をあげたのにもみ消されてしまっている人がいて、苦しい思いをかかえたまま居場所がないという状況は、6年前と変わらずあります。そのことにわたしたちが気づき、苦しい、おかしいと思うもの同士が集まって、思いを共有し連帯することでエンパワーメントしていきたいという思いでテーマを定めました。

しかし、準備を進める中で、それぞれが抱えている課題は多様で、それゆえに自分も加害の立場にあるのではないかという問いに向き合わなければならないことにも気づかされました。どこまでお互いの痛みを共有し、つながっていけるのか。ともに苦しみを生む構造を見抜き、聖書を読み直し、新しい視点を学ぶことを通して、それぞれに闘っている個が連帯していく、そんな場を目指しました。

果たして、どれだけ分かち合われたかはまだ分かりません。今回は、いろいろな立場の方々に参加され、それゆえに提案された課題も多岐にわたりました。法律婚への思い、異性愛の人と同性愛の人との連帯の行方、セクハラ、性的マイノリティーや女性教職の痛み、それぞれの問題の共通性、女性の視点で聖書を読んだこと、またそこにかかる思い……。ただ、これだけ多くの方が、性と人権について教会が問題に答えていない、むしろ問題を内包していることに疑問を持ち、それぞれの思いを持ち寄ろうと集まって来られたことは、このような場が必要とされていることなのだと思われ、励みになりました。また、次回の会議を担う実行委員の方が手をあげてくださり、つながっていく希望を感じました。(2018年9/16～17 於 神奈川県マホロバ・マインズ三浦 参加者63人、賛同人34人、賛同団体8)

(かわち りえ/日本バプテストキリスト教目白ヶ丘教会)

## 「セクシュアル・ハラスメントと性差別」

城倉 由布子

「教会の異性愛主義・家族主義を問う」というテーマのもと「第3回 性と人権 キリスト教全国連絡会議」が、昨年9月に行われました。2日目の午前中は3つの分科会が行われましたが、私はその内のひとつを「教会のセクシュアル・ハラスメントの現状と課題」と題して担当させて頂きました。

当初、準備した段階では、「セクシュアル・ハラスメントとは何か」という基本的な知識の話を中心にする予定でした。しかし、1日目の基調報告を聞きながら、セクシュアル・ハラスメントというものが、意識するしないにかかわらず、性差別意識によって行われること、そしてその意識を下支えしている現状が教会にはあるということを今一度強く認識しました。

「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にある」とはイエスさまの約束の言葉ですが、「二人または三人がイエスさまの名によって集まるところには、ハラスメントが起きやすい」という悲しい現実が教会にはあります。それは「家族主義」、またそこから派生するところの「異性愛主義」が教会の基本的なシステムの中にあることが大きな要因です。その「性差別」の現状を3人の実行委員の方々の基調報告から改めて問いかけられたのです。

そこで、発題の始めに、日本バプテスト連盟のセクシュアル・ハラスメントの取り組みが始まった経緯について話しました。その経緯についての大切なポイントは「性差別問題特別委員会」の設置が先にあったということです。「性差別」解消への取り組みが始まっていたからこそ、その土壌の上に「セクシュアル・ハラスメント」の取り組みもまた始めることができたということをお話させて頂きました。

また、早くも10年を過ぎた相談窓口の活動から、実際にどのようなケースがあるのかということもお分かりしました。最近の特徴として、インターネットを介したハラスメントや、教会外で職を持つ教役者が、職場で起こすハラスメントの問題が増えていることがあることなどです。

日本バプテスト連盟の窓口設置への要望は、日本ホーリネス教団のK牧師による性暴力事件被害者家族（連盟教会員）からのものでしたが、分科会の最後にそのことについて知りたいという要望が出されました。ホーリネス教団の検証作業などを通してキリスト教界では周知されているものという私の思い込みが間違いであったことを知りました。機会を捉えてこの事件についてきちんと伝えていかななくてはならないと思われました。

(じょうくら ゆうこ/ 泉バプテスト教会)

## 「命の支配を許さない」

宇都宮 毅

2018年12月14日、辺野古の海に、基地を作るために土砂が投入されました。人々の叫び、海の生き物たちの叫びが聞こえてきます。この土砂投入は、沖縄の人たちの思いを無視し、踏みにじる行為であり、「本土」と沖縄の分断、沖縄の人たちどうしの分断そのものを象徴しているのです。さらにその分断は、他の国々との分断も現しています。作られるのは、軍事基地なのです。軍事基地には、必ず犠牲が必要とされます。今まで、沖縄はどれほどの犠牲を基地のためにしてきたでしょうか。戦争とは、武器を持って戦うことではありません。戦争の目的は、相手国を支配し、命を支配することです。そこでは、命を支配する訓練、いいえ実戦がなされています。命の支配は、敵、味方関係なく行われるのです。さらに命の支配は、世界の二分化を起こしていきます。男性と女性、強い者と弱い者、無駄死にと名誉の死など。そして二分化を進めるためには、犠牲が必要とされるのです。すべての命が大切にされては、困るのです。私たちが与えられている命と命を分断し、支配しようとする基地は共存できないのです。

沖縄・高江のヘリパット建設現場で反対運動をしている方々のところに行った時のことです。ある方から、こんなことを言われました。「クリスチャンは良いですね。聖書に、『平和を実現する人々は幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる』と書かれていますからね」。私は、それからずっと問われています。私の住む岐阜市は、隣に各務原市があり、そこには航空自衛隊の基地が存在しています。日本にこの基地が戻って来る前は、アメリカ海兵隊の軍事基地「キャンプ岐阜」が置かれていたのです。当時の新聞を読んでもみると、今の沖縄と同じことが起こっていたのです。レイプ、強盗、殺人など。そんな基地が沖縄に移設されたのです。基地が沖縄にあるということは、私自身が沖縄の犠牲の上に立っていると言えるのです。

大義のために、小さいことには目をつぶる。そんな論理性がそこには存在しています。そして大義のために、犠牲になれます。アジア・太平洋戦争において、「本土」の時間稼ぎの捨て石にされ、その後はアメリカの統治に入り、土地も、人権も、生の全領域において、支配されてきたのが、沖縄です。そして日本に戻ってきたとしても、そこで待っていたのは、またもや日本のために犠牲になるという現実だったのです。

社会のために、国のために、命の尊厳が奪われるのです。私たちは、いかなる命も犠牲にしてはいけないと言い貫く必要があるでしょう。被造物の生と死を神から与えられている尊いものと考えている私たちは、その全領域を誰にも渡してはいけないのです。

(うつのみや たけし/ 性差別問題特別委員会協力委員 岐阜バプテスト教会)

編集後記：今回「第3回 性と人権 キリスト教全国連絡会議 2018」より2名に執筆をお願いしました。教派や地域を越え集う現実を思います。性差別や暴力は、教会にも存在します。教会は忘却から自由になり、「いのちの選別は許されない」と真の平和へ歩を進めたいです。(今治バプテスト教会 今井朋恵)